

なるがよしとして、芋虫の動くにも驚き、風の葉を吹くにも心をなやますを以て、やさしげなるものやうに言ひはやし、婦人の剛徳を養ふことに、勉めざるは、戦捷國として尙更一大欠點である。なんと寒心に堪へぬことではありませんか。

### 春の十七字詩

鹽野奇零

正月や皆が足袋はく山の家  
正月は皆鶯の心かな  
正月は松に極まる朝日かな  
正月や火桶抱へて梅の花  
正月や心の底の改まる  
荒磯や雨の二月を啼く千鳥  
湖の漣寒き二月かな  
氣の軽くなるや二月の草の色  
池はまだ半分氷る二月かな  
二月やつもらぬ雪の二日降る  
掃く跡へ水の戻りぬ春の雪

春なれや雪は降りても暖かき  
朝日さす樹々の光りや春の雪  
藪入や上野淺草日は暮るゝ  
藪入や先づ兩親の墓参り  
藪入や里にかかしき京言葉  
藪入の羽織短かき小僧かな

### 短歌

菅原櫻心

○ 神々が快樂の園に老いまさる松の大木は神さびて  
榮ゆ  
ともすれば若き日のこと浮び来てうれしなつかし  
森蔭の家  
秘めますかみ胸よ永久に秘めまさは語り明さむ日  
ぞ遂になき  
○ 床の間の堆朱の卓に香焚きて正氣の歌を先づ誦し  
て見る  
ちゝとなく小鳥に夢を破られていそぎ閑伽汲む尼  
君わかき

中西竹溪

○ 秀子  
白梅や二十日の月のありありを花ことごとく匂ひ  
吐きぬれ

○ 竹鳥芙蓉

初明けや大富士浮ぶ海原の水むらさきに鐘ひいさ  
來る  
春立つと庭燎たくなり廣前のみどり重ねる松蔭に  
して

○ 八くも

年しに又くれんとす悲みをひとつくはうつ除  
夜の鐘  
夜は更けぬ淡き鳥根に火は見えて千鳥の聲のあは  
れ聞ゆる

○ 鈴木永五郎

よき人は裕に情ぬひこめて物思ふ夜をかりがねの  
聲  
わびしさかそゝろ夕扉に立ちよれば穂すゝきゆら  
き鐘低う鳴る

○ 林静子

冷えまざる胸の真底に植えもせむ聖さに匂ふ水仙

○ の花  
白梅や物おもはしき美き人がかさね袂をすべりて  
落ちぬ

○ 加藤たまも

わがながす涙千だまの光りしてあさ日に立ちぬ雪  
解する竹  
白雪にもゆるが如き唇の笑まひうつくし寒梅の花

起雲

下京や梅に被衣すあで人の

袂より曳く彩霞かな

明鐘やわれよみかへる心地して

仰げばたかし不二の神山

\* \* \* \*

短歌  
歓迎  
伊勢。白子局区内真宮宛

